大学総合研究　20：179-187，2018
＜実践報告＞

幼児および児童を対象とした自然観察会の役割

Role of the nature observation meeting for infants and elementary school children

鈴木信夫*　　大橋田鶴子**

Nobuo SUZUKI*　Tazuko OHASHI**

*　日本女子体育大学体育学部
** 国立あゆみ保育園

*　Faculty of Sports and Health Sciences, Japan Women's College of Physical Education
**　Kunitachi Ayumi Nursery School

Abstract： We showed the practice record for approximately 30 years of the nature observation activity organized by the authors for infants and children. As a recent trend, the participation of pre-school children, lower grade primary school children and their families is mainstream. Insect breeding has attracted attention as education for nurturing respect for life against social problems such as bullying of children in recent years. The nature observation society organized by us is considered a useful activity that contributes to the development of the attitude of respect for life.

Keywords：nature observation, infant, school child, child care studies (environment), life environment studies
キーワード：自然観察，幼児，児童，保育内容の研究（環境），生活科

Ⅰ．はじめに

近年，子供のいじめや自殺，子供による殺人事件が大きな社会問題になっており，これに伴って，教育において生命尊重の心を育むことの重要性が叫ばれている．2006年に改訂された教育基本法の第2条第4項（教育の目的）には，「生命を尊び，自然を大切にし，環境の保全に寄与する態度を養うこと」と明記されている[9]．さらに幼児教育の分野においては，平成 30 年度より実施される新幼稚園教育要領第2章の領域「環境」の内容⑸および，新保育所保育指針第3章「環境」の3歳以上児の保育に関するねらい及び内容⑤には，「身近な動植物に親しみをもって接し，生命の尊さに気付き，いたわったり，大切にしたりする」[10,5]とうたわれている．

また，幼児教育から小学校教育への橋渡しとしての教科である生活の内容⑺にも，「動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して，それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ，それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに，生き物への親しみをもち，大切にしようとする」と明記されている（平成 32 年度から実施される小学校学習指導要領[11]）．このように幼児・児童に対して命の尊さを教えるために，幼稚園・保育所や小学校での自然教育の重要性は，ますます高まっている．

同時に，急速に移り変わる自然環境・家庭環境の中で，子供にとって園外，学校外での積極的な自然とのふれあいにも同等の意義があると考え，筆者らは幼児・児童を対象にした自然観察活動を 30 年近く継続して行っている．

以下に，その活動の記録を紹介し，改めてその有効性について検討する．

Ⅱ．実践の記録

1．はけの森緑地の特徴

数万年前に古多摩川が武蔵野台地を侵食してできた国分寺崖線は，通称「はけ」と呼ばれる．1990年，はけの一角（小金井市中町4丁目17番地付近）を緑地保全の目的で東京都小金井市が整備し，小金井市民が苗木を植え，はけの森緑地（図1）が誕生した．その後，1993年3月31日に，はけの森緑地から徒歩5分ほどの小金井市中町 4 丁目 12 番地にあった旧国鉄の集会施設跡地を整備した，はけの森緑地2（図2）も誕生した．

はけの森緑地には，失われつつある武蔵野の自然環境を復元しようと，はけにもともと自生する樹木の苗を植え，当時としては目新しかったビオトープの考えを取り入れて人工の池，丸太積み，落ち葉溜め，ハチ宿等が設置された．一方，はけの森緑地2は，もともと庭園のような造りになっていたことから，はけにあった植生の復元は行わなかったが，前者同様に周辺からの生物の移入を期待して，ハチ宿等の，ビオトープの考えを取り入れた工夫がなされている（図3）．

図1　第1回はけの森調査会（1990年12月9日撮影）

図2　はけの森緑地2（2014年5月11日撮影）

図3　はけの森緑地2のハチ宿（2014年4月13日撮影）

2．はけの森調査隊

はけの森調査隊は，前述のはけの森緑地の苗木の成長を見守り（苗木調査は1997年まで継続された），緑地を中心に，子供たちに自然を体感してもらうために，東京都みどりの推進委員[注1]小金井地区会の有志が母体となり，1990年に発足した自然観察団体である（代表は筆者

の一人である大橋）．

発足当初は，1990年に誕生したはけの森緑地が主に活動の場であったが，近年は，都立武蔵野公園と都立野川公園の中を流れる野川沿いと，はけの森緑地2が調査会の中心となっている．筆者の鈴木は1997年4月から調査隊のスタッフとして，主に昆虫等の観察や解説を担当している．創設当初，調査隊のスタッフは6名ほどいたが，現在は3名となっている．

春，夏，冬の年3回の定例調査会（原則的に，午前9時30分から正午まで）が実施され，2001年からは年4回のミニ調査会も開催されている．開催の告知は，小金井市報への掲載，チラシ配布，市民掲示板へのポスター貼付，登録会員へのメール配信，ホームページでの案内等で行っている（2017年6月以降は，チラシ，ポスターでの広報は廃止）．参加対象は子供たちだが，保護者以外の大人が参加することもある．定例調査会では，毎回テーマを決め，観察の要点を載せた，はけの森カード（資料カード）を作成し配布している（図4）．テーマは一応決めてはいるものの，テーマ以外の生きものにも当然遭遇するので，毎回変化にとんだ調査会となっている．夏には野川の中に入って，魚や水生昆虫等の採集，観察も行っている（図5）．

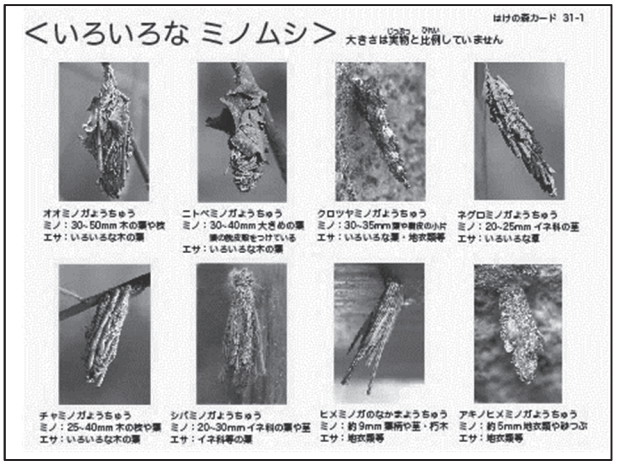


図4　はけの森カード

図5　水生生物の採集（2015年7月19日撮影）

調査会の最後には，各自が採ったものを参加者全員で観察し，スタッフが種名，形態や生態の特徴等を説明するが，子供たちが図鑑や資料カードを使って名前調べをすることもある．携帯用の実体顕微鏡を使用した観察や（図6），採集した生物のスケッチ，感想文を書いてもらうこともある（図7）．

図6　実体顕微鏡による観察（2010年2月20日撮影）

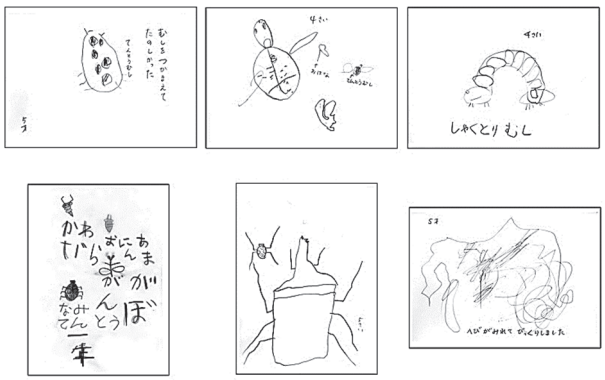


図7　参加者（4歳～6歳）が作成したスケッチ（第47回はけの森調査会）

調査会の終わりに採集した生きものを元いた場所に戻すようにしているが，時には自宅で飼育したいという子供もいる．その場合には，飼育できるだけの基礎知識や経験があるか，保護者の理解が得られるかを確認し，可能と判断した場合は，後日，飼育の記録を見せてもらうことを条件に許可することがある．

ミニ調査会は，はけの森緑地 2 を使って行われるが，特にテーマは決めずにその季節に応じた生き物の観察を行っている．また，緑地保全のために参加者全員で，緑地内にある池に沈んでいる落ち葉の清掃や，アメリカザリガニ等の特定外来生物の駆除も時々行っている．

定例調査会およびミニ調査会の当日の様子は，2008年7月までは紙媒体の「はけの森通信」，「新はけの森通信」（図8）によって，2009年2月からは，はけの森調査隊

の公式ブログ（http://hakenomori.seesaa.net）で，「調査会報告」として報告されている．

これらの活動は実践例として，大橋[14]により概要が紹介されているが，今回は原則年3回行われる定例調査会活動の，より詳細な実践記録を以下に報告する．

なお，本団体は長年にわたる自然教育活動が評価され，2001年8月に第8回コカ・コーラ環境教育賞奨励賞を，2009年11月に第7回小金井環境賞を受賞している．

図8　はけの森通信（上：はけの森通信，下：新はけの森通信）

3. 活動記録

表1に，はけの森調査隊の第1回（1990年）から最新の第 82 回定例調査会の開催年月日，テーマおよび内容等を以下に示す（臨時調査会等は省略）．

(1) テーマ

1990年の発足当初，第1，2回は苗木の成長を記録することが主目的だったが，その後の活動は，緑地を中心に自然観察や自然素材を使用した工作等が行われるようになった．また，1996年ごろまでは，毎回のテーマをスタッフの得意な分野から選ぶ傾向があった．そのため，1年間の3回のテーマにはあまり関連性がなく，季節ごとに手探りでテーマを決めていった時期であった．

その後，1997年以降になると，例えば，1997年11月から1998年7月にかけて行われた第22回から24回調査会のように（テーマは，生きもの達を呼ぶ庭①②③），連続した3回の調査会に対して，共通テーマを設けての実施が主流になり（1999年以降は，基本的に年度ごとに，テーマを設定），現在に至っている．

年度ごとに，春，夏，冬の調査会に対して関連性をもたせた理由は，連続して参加する隊員（参加者を，はけの森調査隊では，隊員と呼んでいる）が少なからずいることから，連続参加することで，季節とともに変化する自然に気付いてもらおう（例えば観察されるチョウやトンボの種類が変わる等）という意図がある．

(2) 調査会の内容

各回の主な内容を，動物（昆虫等），植物，工作（木の実や枝等の自然素材を使用），その他，の4種類に分類すると（表1），2004年ごろまでは，各内容がほぼ均等に実施されていたことがわかる．しかし，それ以降になると内容は，ほとんど動物に限定されている．その理由は，創設当初にいた植物専門のスタッフが，いなくなったことも一因だが，参加者が幼児，児童という事から，どうしても昆虫等の動きのある生き物の観察に，人気が集中することによる．大人を対象とした自然観察会では，植物の観察会も盛況だが，子供中心の観察会ゆえに，ある程度，内容に偏りが生じるのは仕方のないことである．

(3) 調査会の実際

2017年6月4日（日）に都立野川公園で行われた，第80回はけの森調査会（テーマ：初夏のチョウをさがそう！②）を例に，調査会の実際を以下に紹介する．

①集合

午前9時30分，都立野川公園北門に集合（図9-①）．参加者のチェック後，スタッフの紹介．参加者30名（スタッフ4名を含む）．今回のテーマ，観察順路（公園北門～わき水広場），注意事項等を説明し，調査開始．

②野川沿いでの採集

野川沿いに，下流に向かって調査を開始．土手沿いの道を歩きながらチョウやその他の昆虫を探す．その後，土手を下り，昆虫の探し方や捕まえ方を教えながら川沿いに進む（図9-②），茂みに生息する昆虫を採集．採集した昆虫は，各自，虫かごに入れる．

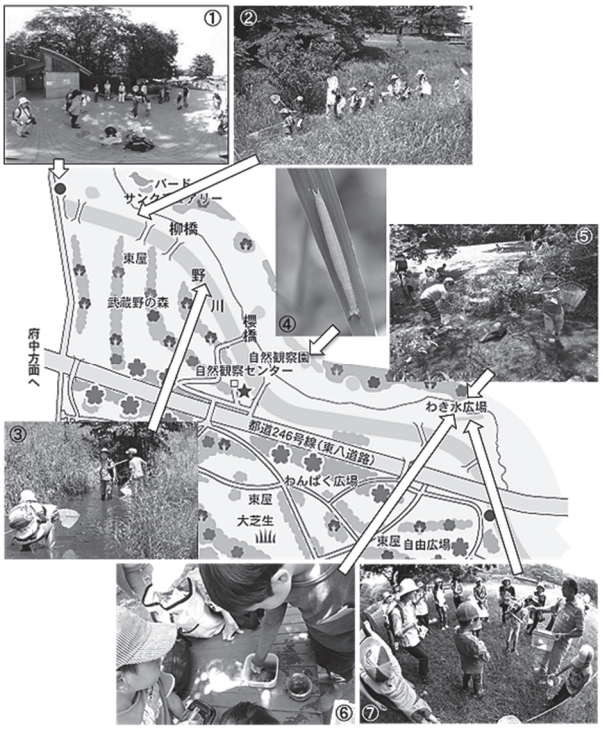
採集もしくは観察できた昆虫：モンシロチョウ，スジグロシロチョウ，シオカラトンボ，ウリハムシモドキ，ヤブキリ幼虫，ガガンボの仲間等．

③水生生物の採集

午前10時，野川に架かる柳橋と櫻橋（図9参照）の中間で，一旦，採集した昆虫を参加者全員で確認．スタッフが種名や特徴を説明した後，一部を除いて放す．引き続き，タモ網を貸し出して，野川の中に入り，水生生物

表１　はけの森調査隊の活動記録

月	日	集会の名称	テーマ	内容とその種別					ゲスト講師	参加人数
				内容	動物	植物	工作	他		
10	28	苗木植栽会	みんなで森をつくろう	小金井市主催行事		○				
		スケッチ会	継続観察希望者集合	自分の苗木のスケッチ		○				12
12	9	第1回調査会	これからの観察方法	継続観察用枠作り・計測		○				18
4	25	第2回調査会	春の植物・カード表紙作り	木の芽・菜の花の仲間等		○				24
7	21	第3回調査会	苗木・昆虫観察	主にクモの観察	○	○			○	27
11	4	第4回調査会	ドングリ工作	動物・人形・等		○	○		○	15
4	2	第5回調査会	ビンゴゲームとバーベキュー	はけの森の探検	○	○		○		27
7	21	第6回調査会	昆虫観察と標本作り	採って調べて標本に	○	○			○	38
11	8	第7回調査会	草花遊び	ススキミミズクとバッタ	○	○	○		○	18
4	2	第8回調査会	池の観察とポプリ	蝶形サシェ作り	○	○	○			34
9	5	第9回調査会	昆虫観察	ハチ宿観察・野川～くじら山	○	○			○	30
11	14	第10回調査会	木の実工作	リース・キーホルダー作り		○	○			20
4	2	第11回調査会	ネイチャーゲーム	カードリレー・池の上綱渡り		○			○	28
7	23	第12回調査会	夏の自然ウオッチング	はけの森～野川	○	○			○	35
11	6	第13回調査会	木の実で作ろう	いろいろな木の実で動物等		○	○			22
4	3	第14回調査会	お花見＆竹笛づくり	篠竹の笛		○	○		○	40
7	21	第15回調査会	雑木林の虫たち	スライド・実物を見ての話	○				○	42
10	29	第16回調査会	木の実でつくろう！	木の実を使った箱絵		○	○			22
4	4	第17回調査会	はけの森の仲間たち	展示用作品作り		○	○			40
7	20	第18回調査会	自然観察入門	夏休みの自由研究のヒント	○	○			○	48
11	10	第19回調査会	クリスマスの飾りをつくろう	マツボックリのツリー等		○	○			48
4	3	第20回調査会	落ち葉の下の生きもの達	採ったものを顕微鏡で観察	○	○				36
7	22	第21回調査会	水の中の生きもの達	はけの森～野川	○	○				32
11	9	第22回調査会	生きもの達を呼ぶ庭①	鳥のエサ台と鳥用リース	○	○	○			25
3	31	第23回調査会	生きもの達を呼ぶ庭②	ヤモリの巣箱作り			○		○	35
7	21	第24回調査会	生きもの達を呼ぶ庭③	ハチ宿作り			○		○	30
10	25	第25回調査会	葉っぱずかんを作ろう	葉の拓本・色付け		○	○			20
4	1	第26回調査会	春の生きもの調べ	各自カードに記入	○	○				25
7	21	第27回調査会	夏の生きもの調べ	はけの森～野川	○	○				36
10	31	第28回調査会	秋の生きもの調べ	はけの森1～はけの森２	○	○			○	14
4	2	第29回調査会	トンボ①トンボに詳しくなろう	はけの森２	○				○	20
7	21	第30回調査会	トンボ②夏のトンボ達	はけの森～野川	○					27
10	14	第31回調査会	トンボ③赤トンボの見分け方	はけの森～野川	○					13
3	27	第32回調査会	楽しい木工品作り	はけ森１の間伐材利用ペン立等			○			16
8	28	第33回調査会	夏の生きもの探検	はけ森２～野川・夏の生きもの観察	○	○				27
12	15	第34回調査会	クリスマスクラフト	桜並集会所にてリース等を作成			○			21
4	3	第35回調査会	飼ってみよう！身近な生きもの達①	はけ森２で捕まえたものを飼う	○					25
7	22	第36回調査会	飼ってみよう！身近な生きもの達②	野川に沿って夏の生きもの観察	○					31
12	7	第37回調査会	植えよう・工作しよう！いろいろな木の実	木の実や枝・木材を使って工作		○	○			9
4	3	第38回調査会	カリバチの宿を作ろう！	はけ森でハチ宿の観察とハチ宿作り	○		○			11
7	22	第39回調査会	オニヤンマをさがそう！	野川に沿って夏の生きもの観察	○					33
2	14	第40回調査会	ドリームキャッチャーをつくろう！	はけ森２で材料探し・作成			○		○	12
4	1	第41回調査会	カリバチのふしぎ	はけ森でハチ宿の観察とハチ宿作り	○					32
7	21	第42回調査会	タイコウチをさがそう！	野川に沿って夏の生きもの観察	○					28
2	19	第43回調査会	カニムシをさがそう！	はけ森１＆２の土壌生物観察	○					13
5	28	第44回調査会	春の生きもの	はけ２～野川沿い春のの観察	○					25
7	21	第45回調査会	夏の生きもの	野川に沿って夏の生きもの観察	○					45
2	11	第46回調査会	冬の生きもの	野川に沿って冬の生きもの観察	○					30
4	3	第47回調査会	野川生きものたんけん①	野川に沿って春の生きもの観察	○					40
7	21	第48回調査会	野川生きものたんけん②	雨天のため中止	○					－
2	17	第49回調査会	野川生きものたんけん③	野川に沿って冬の生きもの観察	○					14
4	3	第50回調査会	野川春マップ①	雨天のため中止	○					－
7	24	第51回調査会	野川夏マップ①	野川の夏の生きものマップ作成	○					32
2	23	第52回調査会	野川冬マップ①	野川の冬の生きものマップ作成	○					20
5	25	第53回調査会	野川春マップ②	雨天のため中止	○					－
7	23	第54回調査会	野川夏マップ②	野川の夏の生きものマップ作成	○					5
2	21	第55回調査会	野川冬マップ②	野川の冬の生きものマップ作成	○					15
5	31	第56回調査会	コムラサキをさがそう	野川に沿って春の生きもの観察	○					20
7	22	第57回調査会	オニヤンマ・タイコウチをさがそう	野川に沿って夏の生きもの観察	○					8
2	20	第58回調査会	オサムシをさがそう	野川に沿って冬の生きもの観察	○					17
5	30	第59回調査会	ハチ宿を作ろう！	はけ森2でハチ宿の観察とハチ宿作り	○		○		○	17
7	18	第60回調査会	箱メガネをつくろう！	野川に沿って夏の生きもの観察	○					21
2	19	第61回調査会	ワラ巻きの中をしらべよう！	ワラ巻きの中の生きもの観察	○					5
6	25	第62回調査会	チョウたちはどこにいる？	野川に沿って春の生きもの観察	○					23
7	17	第63回調査会	トンボやヤゴはどこにいる？	野川に沿って夏の生きもの観察	○					34
2	19	第64回調査会	冬ごしの生きものはどこにいる？	野川に沿って冬の生きもの観察	○					18
5	27	第65回調査会	チョウたちはどこにいる？②	野川に沿って春の生きもの観察	○					20
7	22	第66回調査会	トンボやヤゴはどこにいる？②	野川に沿って夏の生きもの観察	○					18
2	17	第67回調査会	冬ごしの生きものはどこにいる？②	野川に沿って冬の生きもの観察	○					14
6	2	第68回調査会	もっと知りたい！初夏のチョウ	野川に沿って初夏の生きもの観察	○					28
7	21	第69回調査会	もっと知りたい！水辺の生きもの	野川に沿って夏の生きもの観察	○					30
2	23	第70回調査会	もっと知りたい！冬の虫	野川に沿って冬の生きもの観察	○					31
6	8	第71回調査会	もっと知りたい！初夏のチョウ②	雨天のため中止	○					－
7	20	第72回調査会	もっと知りたい！水辺の生きもの②	野川に沿って夏の生きもの観察	○					32
2	22	第73回調査会	もっと知りたい！冬の虫②	雨天のため中止	○					－
5	31	第74回調査会	ゴマダラチョウをさがそう！	野川に沿って初夏の生きもの観察	○					34
7	19	第75回調査会	オニヤンマをさがそう！	野川に沿って夏の生きもの観察	○					40
2	21	第76回調査会	ミノムシをさがそう！	武蔵野公園内冬の生きもの観察	○				○	40
6	5	第77回調査会	初夏のチョウをさがさう！	雨天のため中止	○					－
7	17	第78回調査会	夏のトンボをさがそう！	野川に沿って夏の生きもの観察	○					46
2	19	第79回調査会	冬ごしの虫をさがそう！	野川に沿って冬の生きもの観察	○					24
6	4	第80回調査会	初夏のチョウをさがさう！②	野川に沿って初夏の生きもの観察	○					30
7	16	第81回調査会	夏のトンボをさがそう！②	野川に沿って夏の生きもの観察	○				○	23
2	18	第82回調査会	冬ごしの虫をさがそう！②	野川に沿って冬の生きもの観察	○					20



①集合，②調査開始，③水生生物の調査，④自然観察園，⑤わき水
地図は東京都公園協会ホームページより

図9　調査会の実際（第80回はけの森調査会：2017年6月4日実施）

の採集，観察を行う（図9-③）．採集した生きものは，空になった虫かご等に入れる．午前10時30分ごろ，川から上がり，全員で採集した生き物を観察．スタッフが種名や特徴を説明した後，野川に戻す．

採集もしくは観察できた水生生物：アメンボ，ヌマエビの仲間，アメリカザリガニ，カワニナ，メダカ等．

④自然観察園での観察

野川から上がり，この日は自然観察園（図9参照）での観察を行う．園内は動植物採集禁止のため，入口付近に採集道具を置いて入園．園内の木道に沿って，初夏に出現するチョウを中心に探す．

観察できた昆虫：ウラナミアカシジミ，アカシジミ，ミズイロオナガシジミ，ミドリシジミ，ルリシジミ，ナナフシモドキ，アカスジキンカメムシ，クロコノマチョウ幼虫（図9-④）等．

⑤⑥わき水広場での採集

自然観察園を出て，野川沿いに進み，最終目的地である，わき水広場に午前11時ごろ到着．「はけ」から湧き出る，わき水の中の水生生物を採集（図9-⑤）．採集した生きものは観察用の容器に入れる．およそ 30 分後に集合し，採集した生物を全員で観察．スタッフが種名や特徴を説明（図9-⑥）．特に，わき水は水質が良く，野川本流には生息していなかった，フタスジモンカゲロウやフタツメカワゲラの幼虫，サワガニ等，良好な環境を好む生物が観察できることを説明．

採集できた水生生物：オニヤンマ幼虫，フタスジモンカゲロウ幼虫，フタツメカワゲラ幼虫，サワガニ等．

⑦まとめ

今回の観察会で見つかった昆虫等について，スタッフが総括を行う（図9-⑦）．特に今回のテーマ，「初夏のチョウ」について観察できた種を確認する．最後に，次回の観察会の日程を知らせ，観察した水生生物を採集した場所に放し，正午前に観察会終了．

(4) 参加者の年齢構成

調査会参加者の年齢層を子供：未就学児，小学校低学年（第1学年から第3学年），小学校高学年（第4学年から第6学年）と中学・高校生の4区分と，成人：保護者と大人（単独参加者およびスタッフ等）の2区分，の合計6区分に分類し，発足当初である1991年～1995年，発足から10数年経過した2003年～2007年，最近の2013年～2017年，の3つの期間（各5年間）について，期間ごとに参加者を合計し，上記の年齢層が占める割合を比較した（図10）．

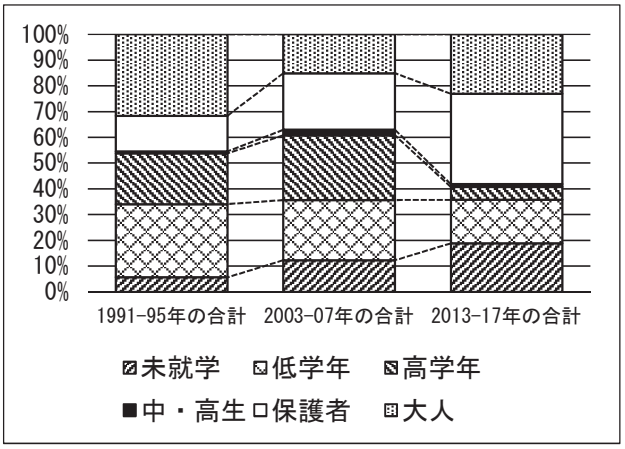


図10　調査会参加者：年齢構成の推移

その結果，年齢構成や参加形態が予想以上に大きく変化していることが明らかになった．発足当初は，小学生が参加者のほぼ50%を占めていた（高学年より低学年がやや多い）．苗木植栽会（1990年10月28日開催）に参加した，はけの森緑地周辺に住む子供たちが大半で，低学年でも子供の単独参加があり，保護者の参加数は少なかった．保護者のほとんどは，母親である．また，発足の母体となったみどりの推進委員の出席が多いこともあり，大人の単独参加も多かった．

発足から 10 数年を経過すると，小学生の参加者が約50%を占めることに違いはないが，高学年が広域から集まるようになったこともあり，低学年に比べて高学年の比率が高くなった．また，未就学児の参加が徐々に増加したことと，小学生を伴った保護者の参加が多くなって

いる．保護者は母親の場合が多いが，両親揃っての参加（5年間で3組）も徐々に見られるようになった．一方，2001年にみどりの推進委員制度が廃止されたため，発足当時参加していた推進委員の参加が激減したこともあり，全体として大人の参加が減少した．

さらに，最近の傾向として，小学校高学年の参加者が大幅に減少し（おそらく，クラブや塾，習い事に通う児童が増加したため），また，低学年もやや減少傾向にあることがわかる．その一方で，未就学児の占める割合が全体の約20%（子供だけで見れば半分近く）となり，それに連動して，保護者の参加が大幅に増加している．大人を別にすれば，参加者の低年齢化が大きな特徴となっている．2012年から全ての調査会を日曜日にしたこと，父親も子育てに積極的に参加しようという時代の流れもあり，父親の参加が多くなった．また，両親の参加が急増し（5年間で28組），家族でイベントに参加する傾向が強くなっていることがわかる．さらに，2009年2月の公式ブログ開設以降，徐々に調査会の認知度も高くなってきたようで，小金井市内に限らず，広く都区内からの参加も見られるようになった．

Ⅲ．生命尊重の教育と自然観察会の役割

「はじめに」で述べたように，近年のいじめ等の社会問題に呼応して，新幼稚園教育要領[10]および新保育所保育指針[5]には，「身近な動植物に親しみをもって接し，生命の尊さに気付き，いたわったり，大切にしたりする」という内容がもりこまれている．同様に，新小学校学習指導要領[11]にも，教科「生活」の内容において，「動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して，（中略）それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに，生き物への親しみをもち，大切にしようとする」と明記されている．

ただ，幼稚園，保育所や小学校で動植物に触れ合い，飼育，栽培するという考えは，別に最近の発想ではない．例えば，我が国の小学校における動物飼育は，日本獣医師会の報告[15]にあるように，明治以来の歴史がある．同様に，幼児教育においても，井上[2]が述べるように，大正時代に保育項目「観察」が取り入れられて以降，飼育栽培と戸外保育が自然とかかわる活動の中心的内容として実施されるようになった．

しかし，井上ら[3]によって，東京都と兵庫県の私立幼稚園の約20%，東京都の公立保育所の16.7%が動物を飼育していない現状も明らかになっている．百瀬[8]の調査における，保育所の回答に見られるように，鳥インフルエンザの流行や，動物アレルギーをもつ園児の増加等から，やむをえず動物飼育をあきらめる場合もあるが，やはり，教育要領等の趣旨からも，より多くの子供が動物と触れ合えるために，何らかの対策が必要と考えられる．

また，ただ飼育するだけでは，十分な教育効果は期待できず，より有効な指導法等の研究も当然，必要であるが，百瀬[7]によると，幼稚園，保育所に関する動物介在教育[注2)]等に関する先行研究は少なく，特に保育所に関するものは非常に少ないという結果が示されている．とはいうものの，近年の生命にかかわる子供の問題行動に対して，動物介在教育の重要性に視点をおいた，中川[13]，大仲[15]や梅田[17]等，興味深い研究も存在する．

梅田[17]は，指導要領等に掲げられている「生命の尊さ」について，子供の発達段階で求められる生命尊重の態度が明確でないと指摘した．そのうえで，子供の発達段階と生き物とのかかわり方を明らかにすることを目的に，子供たちに身近な存在である昆虫に注目し，昆虫飼育に関する調査を保育園および小学校で行った．

実態調査から梅田[17]は，幼児は生き物と接し，命の大切さについて考えることにより養われる，「思考力の芽生え」によって生命尊重の態度が発達し，小学校低学年においては，例えば，死にそうな虫を逃がすか飼い続けるかといった，切実な問題を解決するために，生き物とのかかわり方を見直すような，「思考」が児童の発達段階をさらに高めるとした．

このように，教育現場での昆虫飼育が，子供たちの生命尊重の態度の発達段階を向上させることは，梅田[17]の研究からも十分に理解できる．しかし，新幼稚園教育要領[10]の総則には，自然との関わり・生命尊重について，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として，「自然に触れて感動する体験を通して，（中略）身近な事象への関心が高まるとともに，自然への愛情や畏敬の念をもつようになる．また，身近な動植物に心を動かされる中で，生命の不思議さや尊さに気付き，身近な動植物への接し方を考え，命あるものとしていたわり，大切にする気持ちをもって関わるようになる」と，身近な生き物に触れる実体験の重要性が掲げられている．また，新小学校指導要領解説生活編[12]にも，「言葉と体験を重視した前回の改訂の上に，（中略）具体的な活動や体験を通して育成する資質・能力（特に「思考力，判断力，表現力等」）が具体的になるよう見直すこと」と，改訂の基本的な考え方の中に，子供たちの具体的な体験の重要性が明記されている．

本来，子供たちは日ごろの遊びや夏休みの家族旅行等を通して，生き物と触れ，昆虫採集や飼育を経験し，自然に生命尊重の態度を発達させるはずである．しかし，子供を取り巻く自然環境の悪化や，塾や習い事に通う等，子供たちの生活にゆとりが失われるにしたがって，生命尊重の態度を発達させるために必要な，具体的な体験は希薄になっているといわざるを得ない．それを補う目的

で，幼稚園，保育所や小学校低学年で昆虫飼育をテーマにした教育が行われるのであろうが，それは，教育プログラムに組み込まれた体験ともいえる．また，指導者側の問題として，昆虫が苦手な保育者，小学校教員（さらに親も含め）の存在（上田ら[16]，木村ら[4]）についても，何らかの対策が必要である．

藤田ら[6]は，調査した小学校の女子児童の半数以上が，学年を問わずに虫嫌いであったことを挙げ（男子児童では0%～30%），その解決方法の一つとして，自然の中での生き生きとした昆虫の生態を見ることを提案している．また，木村ら[4]は，子供が虫嫌いになるのは，小学生の時期が一番多いことを指摘している．このような観点からも，筆者らが実践している，はけの森調査会のような幼児や低学年児童を対象とした自然観察会は，虫嫌いの子供を作らない，あるいは減らす，勉強では得られない貴重な具体的体験を提供する役割をもっている．また，長年にわたり観察会を実践してきたスタッフは，観察や飼育の専門知識に裏打ちされた指導力を有している．したがって，このような自然観察会は，梅田[17]が提案した，子供の生命尊重の態度を発達させることに，十分貢献できると考えらえる．

さらに，自然観察会に参加し，虫がどのような環境を好み，何を食べているかといった，昆虫の生態を自らの目で見て知ることは，昆虫を飼育する際の大切な知識となる．さらに観察会に参加し，新しい知識を身に付けた子供は，園や教室の中で，“虫博士”として周囲の子供達に，生命尊重の観点からしても，良い影響を与えるであろう．また，子供の虫嫌いの一因が，家族の虫嫌いによるという日高[1]の指摘を考慮すると，最近のはけの森調査会の傾向である，家族そろっての観察会参加は，家庭が生命尊重の態度を育む場としての役目を取り戻す，絶好の契機となるであろう．

このように，我々が長年に渡り実践している自然観察会は，幼児教育における領域「環境」や小学校の教科「生活」と，車の両輪のような関係をなして，子供たちの生命尊重の態度を育み発達させる，重要な役割を担っていると，筆者らは確信している．

注

注 1) 東京都みどりの推進委員は，東京都が 1972 年に制定した，東京の自然環境および自然保護行政に関する「東京における自然の保護と回復に関する条例」によって設置された．区市町村長または自然保護団体の推薦を受けた者のうちから，知事により委嘱された．

みどりの推進委員は，緑化の推進，緑地の保全等に関する普及啓発，実践等の自主的活動を地域住民と連携して進め，都の緑化の推進，緑地の保全等に関する施策に協力し，緑化の推進，緑地の保全等に関して都に意見の提出または通報を行う等の職務を担った．

なお，上記条例の改正に伴い，みどりの推進委員制度は 2001 年に廃止された．

注 2) 特定非営利活動法人動物介在教育・療法学会のホームページ（https://asaet.org/about/ab02/）によると，動物介在教育は，動物を「いのちある教育のツール」として活用し，教育の質及び学習意欲の向上を目的に行われる，とされている（参照日 2017 年 12 月 27 日）．

引用文献

1) 日高俊一郎（2005）虫嫌いの構造仮説．日本科学教育学会研究会研究報告，20(4):73-78.

2) 井上美智子（2000）日本の公的な保育史における「自然とのかかわり」のとらえ方について ー 環境教育の視点から ー．環境教育，9(2)：2-11.

3) 井上美智子，無藤隆（2009）幼稚園・保育所における自然体験活動の実態調査(2) ー 動物飼育の実態 ー．教育福祉研究，34：1-7.

4) 木村紗帆，野崎健太郎（2016）保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識 ー 虫嫌いの仕組み ー．椙山女学園大学教養学部紀要，9：109-119.

5) 厚生労働省（2017）保育所保育指針，http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf，（参照日 2017 年 10 月 24 日）

6) 藤田絢，川上紳一，東條文治，神野愛（2007）小学生を対象にした昆虫に関するアンケート調査と小学 3 年「昆虫を調べよう」における指導上の留意点に関する考察．岐阜大学教育学部研究報告（自然科学），31：57-62.

7) 百瀬ユカリ（2015）幼児教育及び保育所における動物介在活動の意義 ー 動物飼育活動を中心に ー．大東文化大学紀要，53：71-79.

8) 百瀬ユカリ（2016）幼稚園及び保育所における動物飼育活動の意義 ー 実習生の体験から ー．大東文化大学紀要，54：47-57.

9) 文部科学省（2007）新しい教育基本法について，http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan/siryo/07051111/001.pdf，（参照日 2017 年 10 月 24 日）

10) 文部科学省（2017）幼稚園教育要領，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_3_2.pdf，（参照日 2017 年 10 月 24 日）

11) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf，（参照日 2017 年 10 月 24 日）
12) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説生活編，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/12/05/1387017-6_2.pdf，（参照日 2017 年 12 月 29 日）
13) 中川美穂子（2007）小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，4：53-64.
14) 大橋田鶴子（2016）自然との共生感を育む・はけの森調査隊．別冊 昆虫と自然，40-41.
15) 大仲政憲（2010）生命尊重に関する指導のあり方についての提言 ー 児童・生徒から教員養成大学学生の実態に基づいて ー．大阪教育大学紀要第Ⅴ部門，59(1)：15-28.
16) 上田理，林眞平（2005）小学校教師の理科授業に対する苦手意識とその要因．鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，15：57-64.
17) 梅田裕介（2013）幼児教育及び生活科で育む生命尊重の態度の研究．生活科・総合的学習研究，11：149-158.
18) 財団法人日本獣医師会（2009）動物介在諸活動（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育）と獣医師及び獣医師会の役割．1-15.